

霊性の回復セミナー

## 果たして、私たちは聖書を 正しく読んで来たのか

聖書のことばを日本語の概念で読むとき、  
的外れな理解になることがあります。しかし神の概念を  
正しく伝える本来の言語で理解するとき、それまで見え  
なかった神の真意が見えて来ることがあるのです。



## 霊性の回復セミナー

# 果たして、私たちは聖書を正しく読んで来たのか

空知太栄光キリスト教会 銘形 秀則

### はじめに

●今年(2014.7.30)持たれた「全国牧師会」において、「霊性の回復セミナー」のための一枠を与えていただきましたことを感謝いたします。この「霊性の回復セミナー」は、連盟委員長の金本悟牧師が2009年の冬に掲げられた「霊性の回復と開拓伝道のスピリット」というスローガンの下に、2009年の連盟総会以降、国内宣教委員会の新企画として始まりました。実際の取り組みとしてのセミナーは、その年の11月に萩山神の教会でスタートしました。この「霊性の回復セミナー」の目的は、「神の前に静まり」、なによりも「神を愛する」という第一戒の回復を目指すとともに、イエシュアが語られた「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」(ヨハネ 15:5)というみことばの真意を正しく理解して、神との親しい生きたかかわりを自ら建て上げるというものでした。

●「霊性の回復セミナー」は今年の11月で満5年を迎えようとしています。【注1】多くの霊想書を書いたアンドリュー・マーレーという人ははっきりと「教会が衰退するのは、神を瞑想することをおろそかにしたからである。」と述べていますが、神のみことばを瞑想することにおいてどれほどの実を結んだのか、その判断は神におまかせするとして、この営みは今後もさらに強化されていく必要があると信じます。今回のセミナーの問いかけは、「果たして、私たちは神のみことばである聖書を正しく理解して読んでいるかどうか」ということです。特に、この問いかけは、ひとたび与えられた信仰を、次の世代にいかに関心をもち継承していくかという課題にも抵触します。

●連盟のスローガンとしての「霊性の回復と開拓伝道のスピリット」ですが、その中の「開拓伝道のスピリット」に関する限り、私は「開拓のスピリット」にこだわっています。「開拓伝道」は「開拓のスピリット」の一つの現われで、むしろいろいろな領域における「開拓精神」、つまり「パイオニア的スピリット」がこれからの教会に求められていると信じているからです。「はじめに神が天と地を創造された」ということばの中の動詞「創造された」の原語は「パーラー」(כָּרַךְ)です。この動詞は旧約で54回使われていますが、そのうちの49回の主語は「神である主」です。他は人間が主語となって使われているのですが、その中の例として、ヨシヤ記 17章 15節、および 18節は「切り開く」という意味で使われています。他の箇所では、「(道しるべを)作る」、「豊かにする」という使用例もありますが、いろいろな領域において新しく「切り開く」ことが求められているような気がします。今日、聖書を研究するさまざまなツールが存在しています。なかでも1948年のイスラエルの復興によって実現したヘブル語の復興は、聖書の解釈においてきわめて重要なツールと言えます。なぜなら、それは神の概念を伝えるべく神が選ばれた言語だからです。【注2】

●結局のところ、霊性の回復と開拓のスピリットは、聖書のみことばをどのように解釈するかに行き着きます。固定化した既成の解釈ではなく、隠されているみことばの開示は必ずや人を新しくしていく力を解き放ちます。宗教改革をもたらしたマルチン・ルターは最初から改革を起こそうと思ってはいませんでした。地道に聖書を研究し続ける中で、真意を尋ね求めている中で見出したみことばの真理が、当時の時代に大きな衝撃を与えたのです。「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」(新改訳:詩篇 119:130)

とあるように、神はいつの時代においても、神のみことばの真意を熱心に尋ね求める者を捜しておられます。とすれば、私たちクリスチャンが聖書を日々読んでいるかどうかのレベルではなくて、果たして、私たちは聖書を正しく読んでいるのか(来たのか)どうか、そのレベルにおいて自らに問いかける必要があるのです。

●2014年2月の冬の牧師会で取り上げた霊性の回復セミナーでは、「神の恵みの福音」と「御国の福音」との違いを理解しているのかどうかを問いかけました。【注3】前者の「神の恵みの福音」についてはいつでも強調されているのですが、後者の「御国の福音」については意外と語られていないように思われます。イエシュアがこの世に来られて語られた説教、そしてイエシュアがなされた奇しいわざのすべては、「御国の福音」のデモンストレーションでした。しかし、このことに対する関心と正しい理解をもっていないクリスチャンが多いように思えます。実は、「御国の福音」の理解は神の救いのマスタープランの理解と深くかかわります。ですからそのことが教会で教えられていなければ、あるいはそれについての知識を与えられていなければ、それに関連する部分はほとんどわからないこととなります。特に、そのことが扱われている詩篇や預言書を読む場合、読んでも全く理解できませんし、それどころか、むしろ自分中心的な身勝手解釈が多くなされてしまうのです。

●使徒パウロが3年間手塩にかけて建て上げたエペソの教会において、パウロはこの二つの事柄を明確に意識していました(使徒20:24~27)。ところで、この「神の恵みの福音」と「御国の福音」の違いについては右の図を参照のこと。

●自分が聖書をどのように読んでいるのか、そのことへの気づきのために、今回は詩篇1篇と詩篇2篇を取り上げました。それは、詩篇全体の序文と言われるこの二つの詩篇を通して、既成概念ではなく、果たして、新しい発想・新しい視点から解釈することができるかどうかのチャレンジでした。チャレンジと言っても、その目指すところは、詩篇自身が自己主張(焦点を当てて語ろうと)していることを正確に見出すことだけなのです。



●今回のセミナーの時間枠では取り扱うことのできなかつた事柄が多くありますので、この場をお借りして、その部分を補った形でのレポートとさせていただきますと思います。

## 1. 詩篇1篇の中で最も重要なことばは何か

●この設問は、「あなたにとって、この箇所でも最も意味のある重要なことばは何か。」ということではありません。むしろ、この詩篇1篇自身が主張している最も重要なことばは何かという設問です。みことばのテキストを客観的に理解することよりも、みことばが自分に何を語りかけているのかという視点でいつもみことばに向き合っている人にとっては(これはとても大切な読み方ではあるのですが)、すぐに自分に適用しようとする思いが先行してしまい、テキストそのものが何について、あるいは誰について焦点を当てているのかを読み取ることが二の次になってしまうという落とし穴があります。そのときそのときの自分にとって必要なみことばを求めることは決して間違いではありませんが、自分の関心あることばに心が向いてしまうことで、テキストそのものが焦点を当てて語っていることになかなか目がいかないのです。そのために、大切な事柄を大いに損なうということが起こっているかもしれないのです。詩篇1篇はそのことを示す格好のテキストではないかと思えます。

—しばらくここで、各自、詩篇 1 篇自身が主張しようとしている重要な「ことば」が何か。

それを選び出して、そしてその根拠について考え、それを互いに分かち合ってみる時を持ちましょう。—

- 回答例としては、「幸い」、「主のおしえ」、「正しい者と悪しき者」、「口ずさむ」、「何をしてても栄える」が主です。それらは決して間違いではありませんが、お茶に例えるならば、二番、三番煎じと言えるでしょう。最も価値があり、美味しいのは一番茶です。その一番茶に当たる部分が詩篇 1 篇では何かという問いかけなのです。
- ここでヘブル語の原文の直訳を掲載します。翻訳された訳文から離れて、ヘブル原文の構成をよく観察していただきたいのです。節でもなく、フレーズでもなく、詩篇 1 篇のすべてのことばが一語に収斂(しゅうれん)するようなことば。そのことばとは何でしょうか。

### 詩篇 1 篇1節

その人 幸いなるかな

אֲשֶׁר־יֵשְׁרָאֵל

悪しき者たちの 助けによって (彼は)歩かない ~であるところの

אֲשֶׁר לֹא הִלֵּךְ בְּעֵצַת רְשָׁעִים

(彼は)立たない 罪人たちの 道に

וּבִדְבַר חֲטָאִים לֹא עָמַד

(彼は)座らない あざける者たちの 座に

וּבְמוֹשָׁב לְצִים לֹא יָשָׁב

### 詩篇 1 篇2節

その人の喜びは 主の みおしえの中に むしろ まことに

כִּי אֵם בְּתוֹרַת יְהוָה חֲפָצוֹ

夜も 昼も 彼は口ずさむ 主のみおしえを

וּבְתוֹרָתוֹ יְהִיגָה יוֹמָם וּלְיָלָה

### 詩篇 1 篇3節

水の 流れ のほとりに 移植された 木のよう そして彼は~である

וְהָיָה כְּעֵץ כֹּפֵץ עַל-פְּלִיגֵי מַיִם

その時期に 彼は結ぶ その実を ~ところの

אֲשֶׁר פָּרְיוֹ יִתֵּן בְּעֵתוֹ

枯れない

しかもその葉は

לֹא יִבּוֹל

וְעֵלְהוּ

成功する

彼がなす ところの

そのように、すべては

וְצָלִית

אֲשֶׁר-יַעֲשֶׂה

וְכֹל

●原文を見るなら、詩篇 1 篇のすべてのことばを収斂する一語とは、「その人」であることが分かるはずですが。ヘブル語では冠詞付の「ハー・イーシュ」(שְׂאִיִּשׁוּ)です。なぜこのことに気づかないのか。何が妨げとなっているのか。そのことの疑問が私の頭の中でずっと駆け巡り続けています。実は、つい最近まで私もこのことに気づかなかった一人なのです。

●イエシュアが人々に「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたしについて証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」(ヨハネ 5:39~40)と言われました。イエシュアがヨハネの福音書 17 章 3 節で語っているように、「御父を知ること」、「御子を知ること」、また「御父と御子との永遠の愛と信頼のかかわりを知ること」が永遠のいのちであることを聖書(ここでは旧約聖書のこと)が証言しているのに、「あなたがたはわたしのもとに来ようとはしない」と言っておられるのです。イエシュアは当時の人々に的外れな聖書の読み方をしていることを指摘しておられるのです。このことは今日の私たちにとっても同様に適用されます。

●詩篇 1 篇の「その人」について知ることは、私たちが永遠のいのちを得ることにつながりますが、なぜか、「その人」が注目されないのです。ここで「その人」についての情報を聖書から集めてみましょう。

### (1) 語義的情報

●まずは「その人」と訳されたヘブル語「ハー・イーシュ」(שְׂאִיִּשׁוּ)の語彙的情報です。冠詞(「ハー」הּ)付の「イーシュ」(שְׂאִיִּשׁוּ)で文法的には男性・単数・名詞です。「人」、あるいは「人間」のことをヘブル語で「アーダーム」(אָדָם)と言います。しかしここでは「その人」です。「アーダーム」に対して主なる神は、人がひとりであるのは良くない、ふさわしい助け手を造ろうと言って彼を眠らせ、彼のあばら骨でもう一人の人間を造られました。それが「女」(「イッシャー」אִשָּׁה)であり、その「女」に対応する存在が「男」(「イーシュ」שְׂאִיִּשׁוּ)です。

●「その人」(「ハー・イーシュ」(שְׂאִיִּשׁוּ))は一見、聖書のどこにでも使われているように思えますが、実はそうではありません。むしろ特定の人にしか使われていないのです。特に詩篇においては、ヘブル語の正確・厳密な用法としては、驚くなかれ、1 篇と 34 篇 12 節の 2 回のみです。ちなみに、岩波訳の詩篇 34 篇 13 節では、「その人は誰か—いのちを悦び 善きことを見る日々を愛する人は」とあります。創世記での「その人」は、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、そしてヨセフの執事、アブラハムの最年長のしもべであるエリエゼルに対して使われています。特に、アブラハムが自分の息子の嫁を探しに遣わしたエリエゼルについては最も多く使われています。つまり、語彙的な面の情報としての「その人」は、ある特別な人(男性・単数)に取り分けられて使われているということです。

### (2) 尋常ではないライフスタイル

●詩篇 1 篇 1 節に見る「その人」のライフスタイルは、普通の人ではないことが分かります。普通の人間の生き方は、図



A が示すように、「座る」⇒「立つ」⇒「歩く」です。クリスチャンとして生きる上でも、「歩く」ことだけが求められたなら、いつかは歩けなくなることでしょう。「疲れ」たなら、「座る」必要があります。そこから新しい力が与えられて立つことができ、また歩きはじめることができます。ところが、「その人」は、否定的表現がなされていますが、もうひとつの図 B が示すように、A とは全く逆です。「歩く」⇒「立つ」⇒「座る」です。ここにはある秘密が隠されているように思います。それは「その人」のすべての行動の根源が何かを示すような方向性をもった表現でもあり、あるいは、「その人」が神から与えられた使命的順序を示す表現とも言えます。ヘブル語の文法では完了形が使われていて、完璧にぶれることなく確実に実現する人だという預言的完了形として使われているように思われます。「悪者」「罪人」「あざける者」という神を信じない者たちとは仲間になることなく、ましてや彼らと同調することもなく、また彼らに相談することは一切なかったという人です。むしろ、「その人」のすべての関心は「主」の他にはなかったと言えます。

●そのことと関連して、2 節にあるように、「まことに、**その人**は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさむ」人です。「喜び」(名詞)とは、最も大切な事として愛すること、すべてに勝って何よりも第一優先にすることを意味します。また「昼も夜も」とは、どんなときも、あらゆる状況の中において、主のおしえを「口ずさむ」人です。「口ずさむ」という動詞(ヘブル語では「ハーガー」**הָגַר**)が詩篇 2 篇 1 節にもありますが、そこでは「つぶやく」と訳されています。神に敵対する者たちがいつも考えていることが口から出て来たのは「つぶやき」です。つまり「ハーガー」という動詞は、心の中で常に反芻されていることが口から出て来る行為にまで及んでいる動詞です。詩篇 1 篇の「その人」の口から出て来るのは、「つぶやき」ではなく、主の思いやみこころや主のご計画です。口で何かを語る時には、常に主からしか出てこないような「その人」なのです。この意味でも「この人」は尋常な人ではありません。

●さらに、「その人」は水路のそばに植わった木にたとえられています。ここでの「水路」は人間が造った用水路で、そこに移植された木が、時が来て実を結ぶように、「その人」の主とのかかわりは、結果として、何をしても栄え続ける、成功し続ける(未完了形)存在だとしています。この点からも「その人」とは尋常な人ではないことがわかります。

### (3) 三者のかかわりの中に存在している

●これまで、語義的な面から、ライフスタイルの面から「その人」についての情報を探りましたが、もっとより重要な情報がこの詩篇 1 篇の中に啓示されています。「その人」は単独で存在しているのではないということです。昼も夜も、主と向き合い、主の教えを愛し、喜びとして口ずさんでいます。ところが、「その人」と「主」との愛と信頼のかかわりを「幸いだ」と評価しているもう一つの存在がいます。直接的にはこの詩篇を書いた著者と言えるでしょうが、その著者はだれにも分かりません。しかし実在するのです。詩篇の中の「私」と「あなた」とのかかわりの中で、いつもそのかかわりをしっかりと支えている存在です。しかもそのようなかかわりを持つ「その人」を、「幸いだ」(アシュレー)と絶対的評価をくださるような存在です。私はこのような存在を「**人称なき存在**」と呼んでいます。その正体は後に啓示される「御霊」です。この「御霊」は自分の存在を自ら主張するような方ではなく、常に、人に寄り添いながら、神とのかかわりを支え、導き、教え、建て上げてくださる隠れた存在です。

●ちなみに、旧約聖書にはメシアのことがいろいろな比喻で表わされています。その一つ、イザヤ書 11 章 1～2 節では「新芽」とか「若枝」として表わされます。しかも「その上に、主の霊がとどまる」と訳されています。「とどまる」というヘブル語は「ナーハー」(**נָהַר**)で、本来の意味は「導く」という意味です。つまりメシアは主の霊に導かれた存在であり、地上でのすべての活動(教えとみわざ)は、主の霊に導かれることによ

てなされることが預言されています。つまり「その人」、すなわち人としてのメシアは単独では存在し得ないのです。とすれば、この詩篇 1 篇の「その人」とはイエシュアを預言しています。と同時に、詩篇 1 篇は三位一体なる神の愛の交わりを啓示している詩篇だと言えます。

●イエシュアが弟子たちに、自分が父(の愛の中)にとどまっているように、「あなたがたもわたし(の愛の中)にとどまりなさい」ということばの中で、実際、どのようにとどめれば良いのかを具体的に語っていません。しかし詩篇を見るならば、そのことが啓示されているのです。詩篇 1 篇の「その人」は、あらゆる時代に生きる信仰者たちの、つまり詩篇 3 篇から始まる「主に身を避ける人(複数)」(詩篇 2:12)たちの原初的モデルと言えるのです。

●詩篇にはダビデやソロモン、あるいは霊的な賛美リーダーと言われるアサフ、ヘマン、エドトン(エタン)といった人々、あるいは神の民が登場し、ありとあらゆる状況の中で主と向き合っているのですが、そのかわりには、詩篇 1 篇にある原初的モデルとしての「その人」の「型」「写し」「反映」です。詩篇をこのように「**神の三位一体的かかわりの啓示**」だということを念頭において瞑想するならば、神との深いゆるぎない信頼関係を今以上に築くことが可能になると信じます。【注 4】

●ヘブル書 12 章 2 節に「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでいなさい。」とあるように、詩篇 1 篇の「その人」がイエシュアを預言しているというのは明白です。当たり前じゃないかと思われる方もおられるかもしれませんが、意外とこのことに気づかず、周辺的な事柄(それも重要なのですが)に目が行って聖書を読んでしまっていることが多いのではないかと思います。そのために、イエシュアが「わたしが父にとどまっているように、わたしにとどまりなさい」と言われたことのイメージがつかめずにいるのではないかと思います。

●なぜ詩篇 1 篇の最も重要なことばを見出せないのか。その理由として考えられる理由がいくつかあります。

- ①働きとか結果に関心が行く傾向があること。「座る」「立つ」「歩く」というライフスタイルの中で、マリヤのように主の前に「座る」ことよりも、マルタのように「歩く」ことが強いられ、重要視されていること。
- ②クリスチャンが語彙的な情報を得るためのツールとしての原語(ここではヘブル語)教育がなされていないこと。極端に言うなら、そのような教育は信仰には不必要だと教役者や有力な信徒が考えていること。
- ③私たちのうちに、三位一体の神との親しい交わりのイメージが希薄であるということ。イエシュアの中に啓示されている神の三位一体的交わりについての瞑想が希薄なためではないかと考えます。詩篇は様々な状況の中で人がいかに神を信頼していくか、それが記述されている生きたあかしの宝庫です。

●さて、詩篇 1 篇のすべてのことばを一つに収斂することばが「その人」だとすれば、なぜ同じく詩篇の序文である詩篇 2 篇が必要なのでしょうか。結論を先に言うならば、まさにこの詩篇 2 篇こそ神が約束された「御国の福音」の内実だからです。

## 2. 詩篇 2 篇の中で最も重要なことばは何か

●そこで詩篇 1 篇と同じように、詩篇 2 篇でも、その中でこの詩篇が主張している最も重要なことばは何かを捜し出し、その根拠は何かを考えてみましょう。ところが不思議なことに、ここでも多くの方が的を外してしまうのです。回答としては、「主の定め」、「(天の御座に着いておられる方は)笑う」、「(敵を)打ち砕く」、「主を恐れよ」、「王」「シオン」といったことばが寄せられます。これらの回答は決して間違いではありません。それぞれ大切なことばですが、一番茶としての回答ではありません。

## (1) 詩篇 2 篇の鍵を握る「子」の存在

●詩篇 2 篇における最も重要な語彙は、「(わたしの)子」(2:7)です。あるいは「御子」(2:12)です。前者は「御父」の語る「わたしの子」という表現であり、後者は「人称なき存在」(聖霊)が語る「御子」(新共同訳では「子」と訳す)です。同じ対象ですが、原語が異なります。御父の語る「子」は「ベーン」(בֶּן)。人称なき存在(聖霊)が語る「子」は「バル」(בָּר)です。いずれも、「子」「息子」「男の子」を意味します。使用頻度としては、「ベーン」の方が「バル」に比べて圧倒的に多いのですが、いずれも重要です。というのは、この二つの語彙が共に「ベート」(בֵּ)の文字で始まっているからです。「子」が存在するという事は、同時に「父」の存在が前提となっています。この「子」「御子」こそ、御国の福音の鍵を握るキー・マンです。【注 5】

## (2) 神のマスタープランを知り、「御国の福音」を宣べ伝えること

●詩篇 2 篇の中には「彼ら」「わたし」「あなた」といった多くの人称代名詞が使われています。これらが正確にだれを指しているのかを間違いなく答えられるとすれば、その人は神の歴史のマスタープランをかなり詳しく知っている人です。このことがどこかで教えられていないと、詩篇 2 篇はとて難しい詩篇となります。逆に、それを教えられている人は、御国の福音に関する多くの詩篇を理解する鍵をもっていると言えるのです。今日の教会に欠落しているのは、この知識です。主イエス・キリストの十字架と復活による「神の恵みの福音」だけしか知らない人は、詩篇 2 篇に代表されるような「メシア詩篇」、あるいは「御国の福音」を啓示している詩篇を紐解くことができません。「神の恵みの福音」はそれにあずかった人によって「あかし」される必要がありますが、「御国の福音」はあかしすることはできません。「御国の福音」においては、神のご計画を学び、「御国」についてそれを宣べ伝える(教える)ことが求められるのです。使徒パウロはエペソの教会を建て上げる中で、二つの福音のバランスを保ちつつ、教会を建て上げて行ったようです。特に「御国の福音」を宣べ伝えることにおいては、パウロは「**神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいた**」(使徒 20:27)としています。これは驚くべきことではありませんか。

●「御国の福音」を自分のものとして理解するためには多くの学びが必要ですが、このことが今日のクリスチャンに欠落しているのです。自分の救いのあかしを語ることは勿論のこと、神の選びの民(イスラエル)に対する神の心も含めた神のご計画の全体像を、余すところなく宣べ伝えなければならないという課題が教会にはあると信じます。そのような内容を語っていたら教会に足を向ける人が少なくなるとか、伝道が難しくなるという方もいますが、それは神を誤解しています。イエシュアは「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ、それから終わりの日が来ます。」(マタイ 24:14)と言われました。「御国の福音」とは神の救いのマスタープランのことですが、教会はこの「御国の福音」について、聖書に基づいて論証し、説得し、説明することが求められているのです。【注 6】

●これからの時代において、この課題にそれぞれの教会が真剣に向き合うことがないと、自信をもったクリスチャンとして立つことはできないと信じます。また聖書に隠された宝を見つけ出すことはできないと思います。聖書全体がより力をもって語りかけてくるような聖書の読み方を身に付けなければならないのですが、その取り組みの近道はありません。ただ地道に少しずつ進んでいくしか方法はありません。一見、遠回りの道のように見えますが、霊性を回復して、あらゆる領域におけるバイオニオスピリットを持つためには、使徒パウロが言っているような「決勝点がどこかわからないような走り方」、あるいは「空を打つような拳闘」をしている暇などないのです。神の救いの全体像を語る事ができ、それを教えることのできる人を育成するためには、今、地道な取り組みをし続けていく必要があるのです。

## 〔注 1〕

●2009年11月から2014年8月まで、試行錯誤しながらも、これまで続けてきた「霊性の回復セミナー」の内容をまとめたものが、私のホームページ『牧師の書齋』の中に以下の目次でまとめられています。これまでこのセミナーを主催して来た者と言えることは、「霊性の回復」とは、結局のところ、聖書のみことばをどのように解釈して読むかに行き着くということです。

- No. 1 「霊性の回復」の三つの鍵語 —(1) 「追求力」、(2) 「静思力」、(3) 「共生力」
- No. 2 霊性の回復への道としての「詩篇の瞑想」—(1) なぜ、詩篇瞑想なのか、(2) 神の恩寵の世界を引き出していく修練としての瞑想、(3) キリスト教の歴史における詩篇の瞑想の伝統
- No. 3 霊性の回復への「諸段階」—(1) 霊性の回復のレベルⅠ、(2) 霊性の回復のレベルⅡ、(3) 霊性の回復のレベルⅢ
- No. 4 霊性の回復の「しるし」—(1) 義に飢え渴いていること、(2) 「主の家」、「隠れ場」に住もうとすること、(3) 神との交わりを「楽しい」と思えること
- No. 5 レント(受難週)の瞑想で得た三つの霊的「開眼」—(1) 「主の食卓」と「主の晚餐」の違いの開眼、(2) イエスが十字架で語った「わたしは渴く」ということの開眼、(3) 復活後に、イエスがペテロに語られたことばへの開眼
- No. 6 聖書的な瞑想について—(1) 「思い起こす」(ザーハル)、(2) 「思い返す」(ハーシャヴ)、(3) 「思いを巡らす」(ハーガー)、(4) 「思いを潜める」(自分の心と語り合う)、(5) 「静かに考える」(シーアッハ)
- No. 7 瞑想を通して、自ら「問いかける力」を養う—(1) 「問う力」、(2) 「みことばに聞く」ことの難しさ、(3) 自ら「問いかける力」を養うことは、主体的・自立的信仰を建てる
- No. 8 アウトプット志向からインプット志向へ —(1) 「自ら、みことばに向き合う」、(3) 「パフォーマンス指向は行き詰まる
- No. 9 瞑想を通して「いのちを磨く」—(1) 喜びと楽しさ、(2) やすらかさ、(3) ゆるぎなさ、(4) 心の柔軟さ
- No.10 御父・御子・御霊のゆるぎない交わりを証する詩篇—(1) 人称代名詞がだれであるかをはっきり理解する、(2) 御子と御父のかかわり、(3) 御子に寄り添って援護している御霊、(4) 御子にとどまることによって、三位一体なる神の交わりの中に生かされる—〔No.10の補足〕 詩篇瞑想の新たな視点
- No.11 自らの霊的貧困さの気づき—(1) 「心の貧しい者」であることの気づき、(2) 使徒パウロの心の貧しさの気づき
- No.12 霊性の回復の助け主—(1) 不思議なイエスの語りかけ、(2) 神の賜物である聖霊との生きたかかわり
- No.13 当為から意欲への霊性変革—(1) 二通りの生き方(当為と意欲)、(2) 二つの生き方を結びつけた苦難の経験
- No.14 3D 瞑想法の勧め—(1) 縦に読む(味わう)、(2) 横に読む(味わう)、(3) 奥行きを読む(味わう)
- No.15 3D 瞑想法の実際(Ⅰ)—イザヤ書 30 章 15 節—(1) 最初の神の呼びかけ、(2) 神の再度の呼びかけ
- No.16 3D 瞑想法の実際(Ⅱ)—創世記 17 章 1 節—(1) 改名の秘密、(2) 「ハーラフ」の系譜、(3) 「ハーラフ」は神と人とすべての歩みを表わす統括用語
- No.17 文脈に隠されている真理を掘り起こす—(1) 聖書をじっくりと横に読む(文脈を読み取る訓練)、(2) 「あなたも行って同じようにしなさい」とは、(3) 「わたしのもとに来て、わたしのうちにとどまる」という秘義
- No.18 「座す」ことから「立つ」ことへ—(1) 「座す」こと、(2) 「立つ(立ち上がる)」こと、(3) パウロの回心に見る「立ち上がり」(「復活用語」)、(4) パウロの暗黒の三日間の意義(「座す」ことから「立つ」ことへ)
- No.19 ヘブル的視点から聖書を読み直す(Ⅰ)—(1) はじめに、(2) メシアニック・ジューとの出会い、(3) ヘブル的視点から見た聖書の解釈の例
- No.20 原語で瞑想することで、自分をスイッチ・オンしよう !!—(1) 神のことばの真意のねじれ、(2) 訳語による混乱、(3) 恐れずに、原語をカタカナ表記で日常的に使おう

- No.21 3D 瞑想法の実際(Ⅲ)—ルカの福音書 19 章 1～10 節「ザアカイの救い」—(1) 縦の次元から読む、(2) 横の次元から読む、(3) 奥行き次元から読む
- No.22 ヘブリス的視点から聖書を読み直す (Ⅱ)—(1) ユダヤ人の伝統的な過越の食事(ペサハ)、(2) 「この杯」とは第四の杯、すなわち「完了の杯」
- No.23 マトリックス的瞑想法の実際(Ⅰ)—「アドヴェントのための瞑想」—
- No.24 マトリックス的瞑想法の実際(Ⅱ)—「ペンテコステのための瞑想」—
- No.25 本質的な事柄にふれるための瞑想—(1) 詩篇 127 篇に見る「テーマ」、(2) 安易な適用の放棄、(3) より本質的な事柄に向き合う勇氣、(4) 瞑想のあふれからパイオニア・スピリットへ
- No.26 ヘブリス的視点から聖書を読み直す (Ⅲ)—マタイ 15:21～28—はじめに(疑うカ)、(1) イエスから称賛されたカナンの女の信仰とはどんな信仰か(「ダビデの子」という表現)、(2) イスラエルの家の滅びた羊のために遣われたイエス、(3) イスラエルの全家の回復預言に対する無関心さの要因、(4) 異邦人クリスチャンについての正しい立ち位置について
- No.27 ヘブリス的視点から聖書を読み直す (Ⅳ)—使徒 20 章の「パウロの訣別説教」より—(1) 「恵みの福音」と「御国の福音」、(2) 「御国の福音」の視点からの聖書解釈の演習
- No.28 私たちにゆだねられた「和解の務め」とは何か—(1) 「和解」という語彙について、(2) II コリント 5 章 18～20 節に見る「和解の務め」、(3) 「二人の息子の父」に見る「和解の務め」のイメージ、(4) 結論、(5) 付記
- No.29 「果たして、私たちは聖書を正しく読んで来たのか」—詩篇 1 篇と 2 篇を通して—

## 〔注 2〕

●戦争の世紀と言われた 20 世紀半ばで、神は、それまでだれも考えることのできなかった奇蹟を行われました。それはイスラエルの復興です。神はなぜイスラエルを復興させられたのか。その目的は何なのか。その目的の一つとして考えられることは、神が神によって選ばれたイスラエルの民を通して、再び、諸国を祝福するという偉大な器とするためです。それはそれまで諸国には与えられていなかったことを祝福するため、それはズバリ、「ヘブル語の復興」です。二千年近い年月において、ヘブル語は日常語としては使われることはありませんでしたが、国としての復興とともに、ヘブル語をも復活されたことです。この働きに直接的にかかわったのは、エリエゼル・ベン・イエフダーという人でした。それはまさに名前のごとく、「神の助けによってこの偉業を成し遂げたユダの子」でした。つまり、イスラエルの再建(再興)とヘブル語の復興には密接な関係があるということです。そもそもヘブル語は神のことばであり、神の世界の概念を最も的確に伝えるための言語なのです。そのことを念頭に入れておくことは重要です。

●ヘブル語を学ぶということは、単に、一つの言語を学ぶということではなく、御子イエスの観点から聖書を学ぶことなのです。それは聖書のはじめから終わりまでの全体を神からの啓示の書として、すべてが御子イエスを啓示している書として理解することを意味します。ヘブル語を学ぶことは、その鍵を持つことを意味します。またそれは、同時に、人間中心のヘレニズムの世界から神中心のヘブライズムの世界へ渡って来ることを意味します。特に「終わりの時代」においては、ヘレニズムに対抗できる唯一の道はヘブライズムに立つことです。それ以外の道はありません。神はその道を回復しようとしておられるのです。それに参与するためにも、ヘブル語を学ぶことはとても価値ある取り組みと言えるのです。

## 〔注 3〕

●御国の福音は、バプテスマのヨハネやイエス・キリストが旧約で預言されていたメシア的王国が来ることをイスラエルに向かって告げ知らせ、その王国を来たらせるメシアがイエスであることを信じるようにと言われた福音です。この福音が告

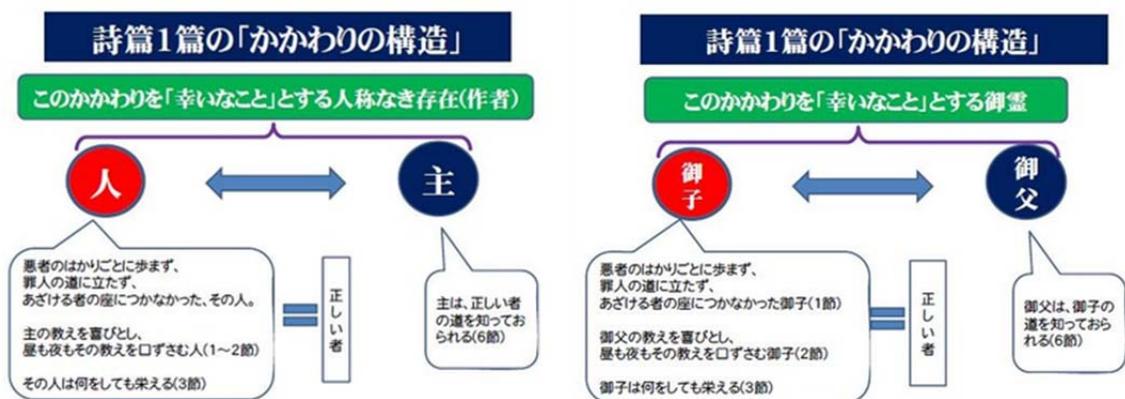
げ知らされた時、もしイスラエルがイエスをメシアだと信じたのであれば、メシア的王国は直ちに到来するはずでした。しかし、イスラエルはイエスを拒否して十字架に架けたので、その到来は将来に先延ばしにされたのです。そして、その将来のメシア的王国到来の時までの間に挿入されたのが教会時代です。その教会時代の人たちに告知知らされているのが(神の)恵みの福音です。

●御国の福音は、イエスの十字架を信じることではありません。なぜなら、その福音が宣べ伝えられた時代にイエスはまだ十字架に架かっておられないからです。御国の福音は、旧約で預言されたメシア的王国の到来がメシアであるイエスによってもたらされることを信じることです。神の恵みの福音は、イエス・キリストの十字架を信じることです。イエスが十字架に架かられて以降の教会時代の人はこの福音を信じることによって救われます。使徒パウロがあかしたのが、この神の恵みの福音です。

〔注4〕

●このことについては、「牧師の書齋」の中の「霊性の回復セミナー」のNo.10の補足「詩篇の瞑想の新たな視点」で説明しています。「霊性の回復セミナー」が2009年の11月からスタートしてから1年を経過した頃、詩篇の瞑想の新しい視点を与えられました。それまでの瞑想の方法はひとつの詩篇からキーワードを選んで、そこにあることばやテーマについて思いめぐらすということを紹介してきましたが、そうした瞑想法は自分中心的なものに終始しやすいことに気づかされました。

●第一期目では、「主の家に住む」というテーマでセミナーを行なってきましたが、第二期目ではその新約的表現として「キリストにとどまる」というテーマで進めるように導かれました。「キリストにとどまりなさい」とは、「とどまる」ことを実践した既存のモデルがあります。それは御子が御父にとどまり、御父が御子にとどまり、また御霊も御子にとどまるという三位一体の神のうちにある愛と信頼のかかわりです。しかし、その三位一体なる神の交わりをどのようにイメージし、いかにそのかかわりを深く知り、それに学び、その中に生きるか、その瞑想の訓練として詩篇はまさに絶好のテキストなのだと気づかされたのです。そこで、詩篇の1篇を取り上げてそこに三位一体のすばらしい交わりがどのようにあかしているかを見てみましょう。この詩篇の登場人物は「主」と「主のみおしえを喜びとし、昼も夜もそれを口ずさむ人」、そしてそのかかわりを「幸いなことよ」と語っている「作者」が登場します。このかかわりを詩篇の中に発見することが重要です。詩1篇に登場する「主」、「その人」、「人称なき存在」をそれぞれ「御父」、「御子」、「御霊」として見なすとき、そこには神のゆるぎない愛の麗しい交わりが存在しています。



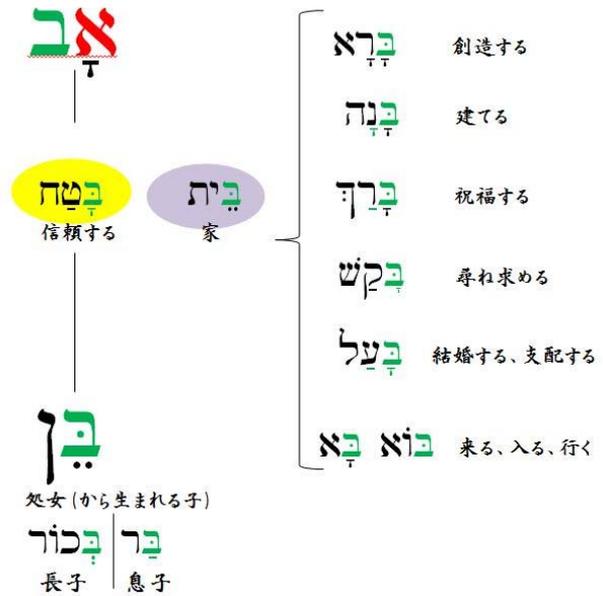
〔注5〕

●不思議なことですが、詩篇2篇における最も重要な語彙が、「(わたしの)子」(2:7)、あるいは「御子」(2:12)であること

になかなか気づきません。神の救い(回復)のマスタープラン(詩篇 2 篇では「主の定め」としてあります)は、この「子」「御子」によって成し遂げられるにもかかわらず、目隠しされているのです。これはサタン(サタン)の惑わしかもしれません。主である「御父」が「わたしの子」と呼び、人稱なき存在である御霊が「御子」と呼んでいる方が語ることはや行いを通してしか、私たちは「主の定め」である神のマスタープランを知ることができません。

● 「父」と「子」のかかわりを示すヘブル語の語彙

父「アーヴ」(אב)は、長子「ベホール」(בְּכוֹר)である子「ベーン」(בֵּן)、ないし息子「バル」(בַּר)を信頼して(「バ-タハ」בָּטַח)、家(「ベ-ト」בֵּית)を建てさせました(「バ-ナー」בָּנָה)。すべての者が、処女(「ベ-ト-ラー」בְּתוּלָה)マリヤから生まれた子(「ベーン」(בֵּן))を尋ね求める(「バ-カシュ」בָּקַשׁ)なら、その息子(「バル」בַּר)を通して、家(「ベ-ト」בֵּית)の中に入る(「ボ-」בּוֹא)ことができます。そして主は、私たちに油を注いで(「バ-ラル」בָּלַל)下さるのです。その油は神の歓迎の喜びとしての油です。またそれは、主からの祝福(「ベ-ラー-ハー」בְּרַכָּה)のしるしです。私たちはこの良い知らせを伝える(「バ-サル」בָּשַׂר)という責任があります。やがて、花婿なるキリストは結婚する(「バ-アル」בָּעַל)ために、花嫁なる私たち(教会)を迎えに来て(「ボ-」בּוֹא)ください。なぜなら、主はアブラハム、ダビデと結んだ契約(「ベ-リ-ト」בְּרִית)を必ず果たされる方だからです。ここには、ヘブル文字の「ベ-ト」の秘密があります。



【注6】

● 「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかされ、それから終わりの日が来ます。」(マタイ 24:14)と言われたイエシュアの言葉を、十字架と復活を土台とした「神の恵みの福音」を伝える緊急性を訴える動機づけとして用いられることがあります。しかし、よく見ると分かるように、ここでイエシュアが語っているのは、「御国の福音」が全世界に宣べ伝えられることを語っているのです。「終わりの日が来る」前には、必ず、このことにクリスチャンが目覚めさせられる必要があるのです。それは神のご計画を正しく知るためです。この神のご計画を知ることこそが、ヘブル語が意味する「真理」(「エメット」אֱמֶת)なのです。イエシュアは「もしあなたがたが、わたしのことばにとどまるなら、あなたがたは本当の弟子です。そして、あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする」(ヨハネ 8:31~32)と語りましたが、当時のユダヤ人はその真意を悟ることができませんでした。ヨハネの福音書はイエシュアのことを「この方は恵みとまことに満ちておられた」(ヨハネ 1:14)と述べます。「恵みとまこと」はワンセットです。「恵み」はヘブル語では「ヘセド」(חֶסֶד)で、「まこと」はヘブル語で「エメット」(אֱמֶת)です。このフレーズからも、「神の恵みの福音」と「御国の福音」がワンセットになっていることが分かります。双方は切り離すことができないのです。